

新元号「令和」ゆかりの地 太宰府



古代九州を統括した地方最大の役所・太宰府政庁跡の風景

1. 新元号「令和」について

平成31年4月1日、日本政府は新たな元号を「令和（れいわ）」と決定しました。

天皇陛下即位に合わせ5月1日から使用される「令和」は、645年の「大化」から数えて248番目の元号となります。

「令和」の典拠は、1200年余りに編纂された日本最古の歌集『万葉集』に収められた「梅花の歌三十二首 序文」にある、

初春の令月にして（しよしゅんのれいげつにして）、

気淑く風和ぎ（きよく かぜやわらぎ）、

梅は鏡前の粉を抜き（うめは きょうぜんのこをひらき）、

蘭は珮後の香を薫ず（らんは はいごのこうをくんず）。

の文言を引用したもので、「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」という意味が込められた元号となっています。

太宰府市のコメント（要約）

4月1日に発表があり、新元号が「令和」と決まりました。その典拠は約1300年前に、ここ太宰府の地で行われた「梅花の宴」を記した、『万葉集』「梅花の歌」32首の序文にあることが発表されたところです。このことは、新しい御代の始まりの慶びに加えて、太宰府市にとって大変光栄なことであり、地元市民をあげて喜んでおります。

この「梅花の宴」を主催したのは、万葉集の撰者・大伴家持の父であり、大納言も歴任した、奈良時代はじめの政治家として有名な大伴旅人です。彼は、神亀四（727）年頃、太宰府の長官（大宰帥）として赴任し、天平二（730）年正月十三日に、太宰府の役所が管轄した西海道の官人たちを、自ら住まう邸宅に招き、この宴を開きました。

新しい御代が、「令月」の如く清新で、「和（やわらぐ）」時代となることを祈念致します。

2. 大宰府と新元号「令和」

かつてこの地には、7世紀後半から12世紀前半にかけて地方最大の役所「大宰府」が置かれ、西海道（九州一帯）の統治、対外交流の窓口、軍事防衛の拠点という重要な役割を担っていました。大宰府の長官は大宰帥（だざいのそち）と呼ばれ、大伴旅人は727年ごろ大宰府へ赴任しました。

大伴旅人は政治家としてだけでなく、歌人としても才を発揮した人物で、赴任した大宰府においても文人たちと交わり、山上憶良（やまのうえのおくら）らと共に優れた歌を残しました。後に「筑紫万葉歌壇」と呼ばれる華やかな万葉文化が、大宰府の地に花開いたのです。

天平2年（730年）正月13日、大伴旅人は自身の邸宅に大宰府や九州諸国の役人らを招いて宴を開催しました。当時、中国から渡来した大変高貴な花であった梅をテーマに歌を詠んだことから「梅花の宴」と呼ばれています。今回、元号「令和」の典拠となった文言は、この「梅花の宴」で詠まれた32首の歌の序文になります。



大宰府展示館では、博多人形師・山村延燦（やまむらのぶあき）氏が製作した博多人形による「梅花の宴」の再現展示をしています。優雅な姿を是非ご覧ください。

3. 『万葉集』について

『万葉集』は8世紀後半頃に成立した日本最古の歌集といわれ、約4500首の歌が収められています。天皇・皇族をはじめ、貴族など上流階級の人々だけでなく、防人（さきもり）や農民まで、幅広い階層の人々が詠んだ歌が収められており、日本の豊かな文化と長い伝統を象徴する歌集です。

『万葉集』を編集したのは、「梅花の宴」を開催した大伴旅人の息子・大伴家持（やかもち）といわれています。宴で詠まれた歌をはじめ、九州にまつわる歌が300首以上収められており、家持が少年時代を過ごした大宰府の風景や「梅花の宴」が強く印象に残っていたのかもしれませんが。

「だざいふ」の**大**と**太**
律令制下の役所を指す場合は「**大**宰府」と「**大**」を用い、現在の行政名「**太**宰府市」や「**太**宰府天満宮」には「**太**」を用いています。

4. 梅花の歌三十二首序文について

「梅花の宴」は、中国の書家・王羲之（おうぎし）が353年に開催した「曲水の宴」にならって、日本の和歌を詠み交わした宴です。ここで詠まれた和歌のはじめに序文がつけられていますが、これも王羲之が記した序文「蘭亭序（らんでいじょ）」にならい、日本人の感性や趣向を基に白い梅花を詠む宴の序文として、大伴旅人が作ったとみられています。

天平二年正月十三日、帥の老の宅に萃まりて、宴会を申きき。時に、初春の金月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫ず。加之、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾け、夕の岫に霧結び、鳥は穀に封められて林に迷ふ。庭には新蝶舞ひ、空には故雁帰る。ここに天を蓋とし、地を座とし、膝を促け觴を飛ばす。言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開く。淡然に自ら放にし、快然に自ら足る。若し翰苑あらぬときには、何を以ちてか情を攄べむ。請ふ落梅の篇を紀さむ。古と今とそれ何そ異ならむ。園の梅を賦して聊かに短詠を成す宜し。

参考文献：太宰府市『太宰府市史 文芸資料編』

天平二年（730）正月13日、帥老の宅に集まって宴会を開く。あたかも初春のよき月、気は麗らかにして風は穏やかだ。梅は鏡台の前のお白粉のような色に花開き、蘭草は腰につける匂袋のあとに従う香に薫っている。しかも、朝の嶺には雲が動き、松は雲の薄絹を掛けたように傘を傾ける。また夕の山洞には霧が立ちこめ、鳥は霧の縮み絹に閉ざされたように林に迷い飛ぶ。庭には生まれたばかりの蝶が舞い、空には去年の秋に来た雁が北に帰って行く。さてそこで、天空を覆いとし大地を敷物としてくつつろぎ、膝を寄せ合っては酒盃を飛ばす如くに応酬する。一堂に会しては言葉を忘れ、美しい景色に向かっては心を解き放つ。さっぱりとして心に憚ることなく、快くして満ち足りている。詩歌を他にして、この思いを何によって述べようか。詩には落梅の篇を作るが、古も今もどんな違いがあろう。さあ、園梅を詠んで、ここに短き歌を試みようではないか。

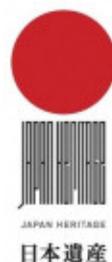
参考文献：岩波書店 新日本古典文学大系『萬葉集 一』

5. 舞台となった大伴旅人の邸宅について

「梅花の宴」の舞台となった大伴旅人の邸宅ですが、大宰府政庁跡の西北に鎮座する坂本八幡神社一帯、大宰府展示館東側の月山東地区官衙、大宰府条坊の中など、いくつか説がありますが、はっきりとは分かっていません。

6. 市内の万葉歌碑ご紹介

日本遺産『古代日本の「西の都」～東アジアとの交流拠点～』に認定された太宰府市には、いにしへの歌人達が詠んだ歌を記した万葉歌碑が数多くあります。大宰府政庁跡周辺には6基、太宰府市全体では40基以上あり、大伴旅人が詠んだ歌は11基あります。これらの歌碑を巡りながら散策してみたいかたがでしょうか。





令和元年5月7日～12日の臨時駐車場を掲載しています